

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.127

2010/06/15

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

初夏の森

空中撮影実施

夏期の山門湿原周辺の景観

山門水源の森の空中撮影は過去何回か実施してきましたが、夏期の撮影が出来ていないためアカガシの新芽が出る時期（アカガシの分布を明らかにする）を狙って6月2日にセスナで撮影しました。今回の撮影目的は、湿原の復元状況の確認・夏期の植生・福井県側の人工林の状況確認です。前日の6月1日には京都市の八丁平の視察に出向きました。この目的は、湿原の遷移の実情とシカの食害の状況を見るためです。

八丁平（堰き止め）と山門湿原（断層活動）は、成因は異なるものの堆積物や周囲の植生等かなり共通点があります。

しかし八丁平は以前から言われているとおり植生の遷移が進行しており湿原としての景観は失われつつあります。遷移の原因は八丁平（自然の遷移）・山門湿原（大部分は人為的改変）異なりますが、長期的に見ると八丁平が山門湿原の将来像ということになります。

山門湿原では、この自然の遷移に任せるべきか、それとも湿原として次の世代に引き継ぐべきかの選択を迫られ「湿原の生物多様性を保全する」ということに梶を切ったのが2002年でした。それが良かったのか、悪かったのかの判定は、今後の保全活動が継続的にできるかどうかにかかっています。もう1つの課題であるシカ・ニホンカモシカ・イノシシによる食害の問題があります。八丁平の食害は予想以上でした。ある意味「明日の山門水源の森」と編集子には映りました。保全活動は順調に進行し、保全活動前を知る人にはその成果の大きさが理解して貰えますが、これが食害を増やす大きな原因にもなっていると思われます。福井県側からの撮影をしたのもそのことを考える必要性からです。山門水源の森の保全作業は、野生動物の餌場提供という側面があります。大規模造林が獣の餌場を無くしているという全国的課題です。

遷移が進行する八丁平

シカの食害で下層植生を欠く八丁平

復元作業中の山門中央湿原



調査区のササユリの密集状態

今年もササユリのシーズンを迎えました。既報の通りシカの食害防止のため多くの会員のご努力で 200 株（蕾を持った株）に金網を設置しました。また「調査区」では、2005 年から実生の生育状況を継続調査しています。2005 年に初めて発芽した株が今年初めて蕾を付けました。感激ひとしおです。この調査区（208m²）では、毎年ラベルを設置して生育状況の追跡をしています。今年も 6 月 7 日で調査が完了しました。この狭い範囲に何と 300 株（今年発芽した実生も含む・左の画像の白いラベルが株のある場所）が生育しています。このように高密度になったのには、毎年草刈を 2 回実施している成果でもあります。調査区以外の草刈は年 1 回ですが、株数の状況は大きくは変わりません。今年は 200 余株の開花ですが、来年は 300 株を超えるはずで

す。自生のササユリがこれほど咲くのは滋賀県下では他にはありません（バイオ増殖で植栽した場所はあるかも知れませんが）。この成果は、2004 年から繰り返してきた草刈の成果でもあります。早急な成果を求めるのではなく、地道で長続きする保全活動の必要性の証です。6 月 19 日の西浅井観光協会主催ハイキングの日には、特別金網を部分的に一時除去してササユリの咲く景観を訪問者に堪能してもらう企画を考えています。花も食害に遭うためその日のうちに再度金網を設置します。当日は、9 時半から金網除去作業を行います。会員諸氏も是非この成果を見届けて下さい。



山門水源の森のササユリの色の多様性

このシーズンになると新聞各紙は、ホタルやササユリを取り上げます。今年も何力所かのササユリ報道に会員諸氏は接せられたことと思います。が滋賀県下で自生のササユリがこれほどの規模で観られるのは、ここ山門水源の森だけです。報道される多くの地域は、バイオテクを使って増殖をしているものが殆どです。株数は多くても、花の多様性がありません。左の画像は、昨年の山門水源の森のササユリです。この色の多様性こそ意味のあることです。バイオで増殖したものは、クローンですから花の色にバリエーションがなく全て同一色になります。また何か特定の病気にかかば、全滅ということがあり得ます。しかし、山門水源の森では、自然交配による増殖（2004 年からの作業）ですから、その心配は



美花は金網の中

一段と低くなります。生物多様性の重要な 1 項目である「遺伝子の多様性」も壊すことなく増殖を図っている本会の活動の意義がここにあります。一昨年から開始した播種もこの点を重視して行っています。今期になってこの成果を聞きつけ視察に来られた団体が既に 2 団体あります。これまでの会員の皆さんの汗の結晶が、じわじわと認知されている証です。重い金網を持ち上げたり、金網設置後も、株が傷まぬようにと調整をしたり、指先が凍てつく晩秋に播種作業をして貰った会員諸氏にとって、美しく咲いている花が金網の中というのはやるせないことと思いますが、この我慢もあと数年です。数年後には、500 株を超えるササユリが観察コース沿いに咲き誇るはずで。それは、現在開花している株の側に来年開花する株が沢山見られることからわかります。今作業に精を出して頂いている会員の目の黒い間に、確実に次の世代に引き継げる状態になることは間違いありません。ササユリ以外の動植物も、現在実施している保全作業を地道に継続すれば同様な成果が得られます。その兆しは、ミヤコアザミ等々で確認することもできます。来訪者の急増は、森にとって必ずしもいいことばかりではないことも念頭におきたいものです。